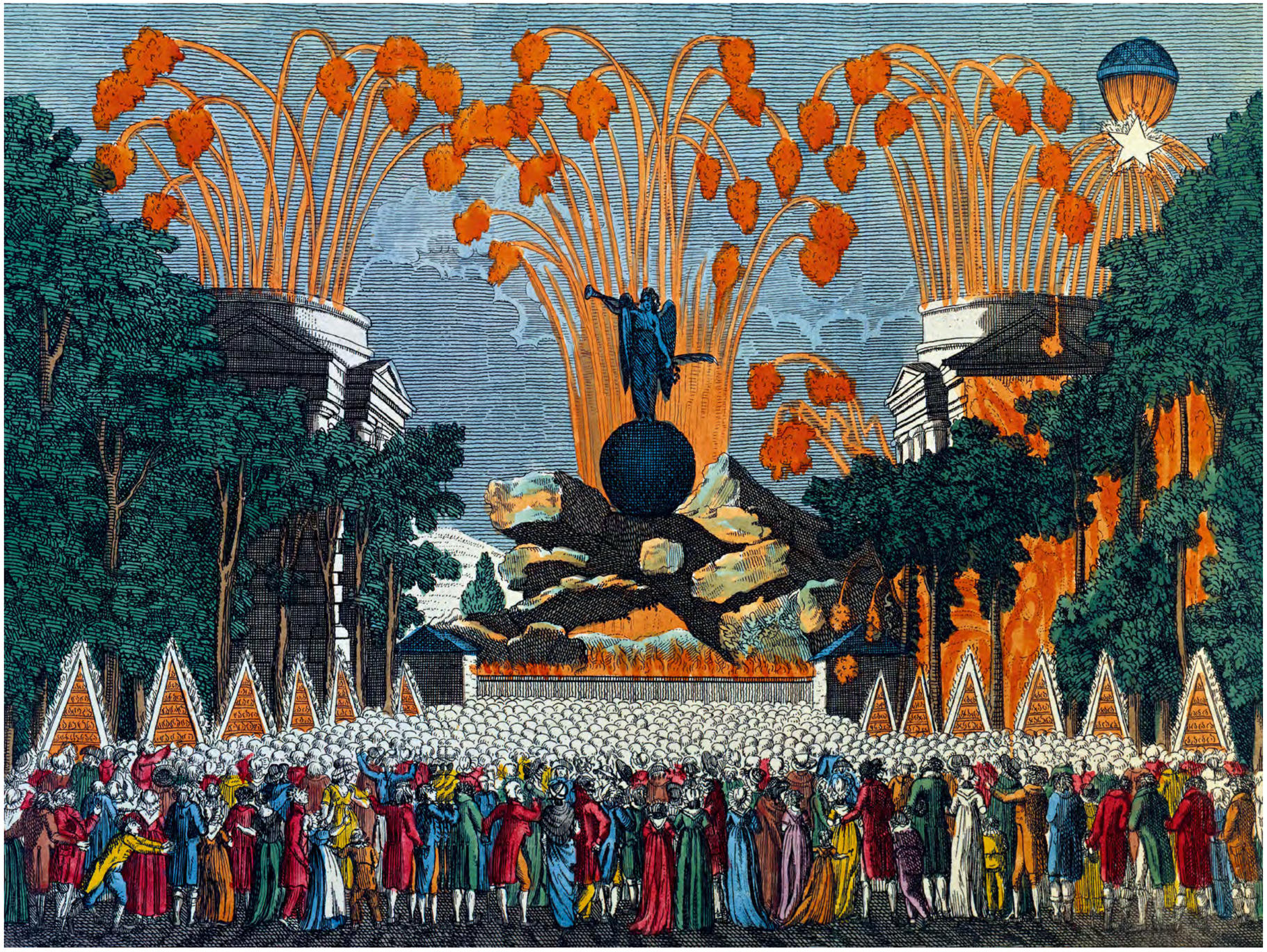
宮廷の花火師たち

中世以来、火薬が生み出す火花の可能性は、
ヨーロッパの人々の想像力を喚起してきた。
そのきらめきは、ルジェリ兄弟の手で最高潮に達し、
各国の王族の目を眩ませた。

文 アントニオ・フェリ



ボローニャは、1088年設立のヨーロッパ最古の総合大学があることで有名だ。だが、18世紀のボローニャから始まったもうひとつの学校も、成功を遂げている。それは、花火師の大名人、ルジェリ兄弟が率いた花火学校だ。ローマに続く第2の教皇領として指定されていたボローニャに、ガエターノ、ピエトロ、アントニオ、ペトロニオの4兄弟が生まれたのは1699年から1715年の間のことだ。花火のデザインで高い評価を受けたルジェリ兄弟は、ベルサイユ宮殿のルイ15世やイギリスのジョージ2世の宮廷にも招かれ、その腕前を披露した。

1730年に故郷を後にしたルジェリ兄弟は、フランスで成功の糸口を探ろうとしていた。当時、末っ子のペトロニオはまだ15歳だったが、生活は非常に貧しく、31歳の長男ガエターノは、多くのイタリア人移民に倣い、パリにあるコメディア・デッラルテ（即興仮面劇）の一座で職を得ようと考えていた。パリに到着したルジェリ兄弟は、コメディ・イタリエンヌの俳優たちに助けを求め、時折、下働きの機会を得た。

その後、この兄弟は、舞台の新しい手法を発明したことで知られるようになる。現代でいうところの特殊効果だ。ガエターノはボローニャ版『花火について』という本を読んだことがあった。1540年のヴァンノッチョ・ビリングッチョの初版本を1678年にボローニャのジョゼッフォ・ロンギが再出版したもので、「金属を溶かして、花火をつくる方法」が説明されていた。さらにガエターノは、モデナ出身のイタリア人、カルロ・ヴィガラーニが、パリで50年前に花火を使ってひと財産を築いたことも耳にしていた。

こうして、ボローニャ仕込みの一大ショーが生まれることになる。ガエターノと弟たちはまず、透明な背景幕をつくり、その後ろで火薬を点火し、カラフルな花火や虹色のロケットで観客を魅了した。ルジェリ兄弟の華やかな舞台効果を求めて観客が殺到し、やがてこの噂はフランス王ルイ15世の耳にも届くことになる。そして、その腕前が国王の前で試されることになった。ベルサイユ宮殿に赴いたガエターノ、ピエトロ、アントニオ、ペトロニオの4兄弟は期待を裏切ることなく、大成功を収めた。回転花火、気球から発射される「爆弾」花火、連続点火の仕掛け花火など、得意技が披露された。なかでも彼らの最高傑作は、1739年8月29日のパリの夜を彩った花火ショーであろう。セーヌ

Inventé par Sailly

Dessiné et gravé par J F Blondel

VEUE GÉNÉRALE DES DÉCORATIONS, ILLUMINATIONS ET FEUX D'ARTIFICE, DE LA FESTE DONNÉE PAR LA VILLE DE PARIS sur la Riviere de Seine en presence de leurs Majestés le Vingt Neuf Aoust Mil Sept Cent Trente Neuf a l'occasion du Mariage de Madame Louise Elizabeth de France, et de Dom Philippe Infant d'Espagne.

［46〜47ページ］
1801年のパリ祭で
シャンゼリゼ通りを彩った
花火の様子。
［前見開きページ］

フランス王女
ルイーズ・エリザベートと
スペイン王子フェリペの
結婚を祝賀し、
パリのセーヌ川で

豪華絢爛な
花火ショーが開催された。
カラー銅板画、
ジャック・フランソワ・
ブロンデル（1739年）。

川をまぶしく照らしたこの祭典は、フランスのルイーズ・エリザベート王女とスペインのフェリペ王子の結婚を祝賀するものだった。ルイ15世は大いに喜び、贅沢に退屈していた廷臣たちも興奮した。

当時のデッサン画から描かれた絵画によって、ルジェリ兄弟が扱った花火ショーの変遷を知ることができる。さまざまな色彩が数千の光となって炸裂する幻想的なシーンもあれば、無数のかんしゃく玉がシュッと音を立てながら、張り子の宮殿や尖塔、アーチ門、ガーデンなどをいわば破壊するような仕掛けもある。ほどなくして、ルイ15世にとってルジェリ兄弟は手放せない存在となり、あらゆる祭典を盛り上げる要職者として、1753年には宮廷内に住居を与えられた。準備にあたっては、何十人もの助手、大工、石工、冶金工を従え、花火ショーの費用は天文学的に膨れ上がった。一度のイベントで20万発ものロケット花火が使われたこともある。また、権力と財力を誇示したいパトロンのために祭典を引き受けることもあった。

ルジェリ兄弟の評判はフランスばかりでなく、ドーバー海峡を越えてイングランドの宮廷にも伝わっていた。イングランドはパリよりも禁欲的ではあったものの、王室の栄光を花火で称えることに同様の興味を示していた。ジョージ2世は、ルジェリ兄弟の少なくともひとりをイギリスに派遣するように要請する。これに応じたルイ15世は、最も経験豊富な年長のガエターノにこの任を命じる。任を受けたガエターノは、その後二度とフランスの土を踏むことはなかった。彼の技量に感動したジョージ2世が、フランスの宮廷に戻ることを許さなかったのだ。1782年にロンドンで逝去したガエターノ・ルジェリには、カンタベリー寺院に埋葬されるという最高の栄誉が与えられた。

ルジェリ兄弟は花火技術の先駆者として知られているが、モンゴル帝国のハンガリー侵攻（1241年頃）で火薬が伝来して以来、ヨーロッパ各地で火薬の実験は行われていた。ある学説によれば、「中国の雪」と呼ばれる硝石は、ドイツの修道僧ベルトルド・シュバルツによって14世紀に初めてヨーロッパにもたらされたという。火薬による発射実験を行い、今日の火薬の製法を最初に示したとされているが、シュバルツが実在の人物かどうか、はっきりしていない。何はともあれ、聞くところによると、最初に花火が見られたのは、1340年頃のドイツであるという。また、ニュルンベルクにも大きな花火学校があり、主に気球から空中爆竹を発射する技術が教えられていた。

娯楽目的の火薬使用は、イタリアでは中世後期に遡り、トスカーナ地方で人気の「聖史劇」（キリストの生誕・受難・復活の物語を主題とした宗教劇）で使用されていた。また、ルネサンスの絶頂期にあるフィレンツェでは、第1回十字軍の聖地回復（1099年）を祝賀する祭典で、花火が使用されるようになった。今日に至るまで、復活祭では「スコッピオ・デル・カッロ」（山車の炎上）が街中に登場し、鳩の形をしたロケットによって点火が行われている。

娯楽目的の火薬使用は、イタリアでは中世後期に遡り、トスカーナ地方で人気のキリストの生誕・受難・復活の物語を主題とした宗教劇「聖史劇」で使用されていた。

18世紀末、フランスではジャコバン派の恐怖政治が起こった後、英雄ナポレオンが登場する。花火イベントは公金を浪費する貴族的なシンボルではあったが、革命政権の倫理譴責の対象にはならなかった。それどころか、ペトロニオ・ルジェリのふたりの息子、ミシェールとクロード・フォルチュニが1804年に皇帝の花火師に任命されている。翌年の1805年、ふたりはナポレオンに従事してイタリアに向かい、先祖の地ボローニャでナポレオンを迎える空前の豪華ショーを取り仕切ることになった。

4人兄弟がボローニャを離れてから、すでに70年以上経った1776年、パリのサン・ラザール通りにある4人のアトリエのあった建物（現在はシナゴーグになっている）の入口の向かい側に、ルジェリ・ガーデンが公開された。パリ初の公共ガーデンで、人々がお酒やダンスを楽しみ、花火を見物しにやってきた。このガーデンは後に閉鎖されたが、ラフェリエール通りと交差する一角には、今もルジェリ兄弟の工房が残っている。兄弟が始めた花火稼業はその後も朽ちることはなかった。ガエターノ、ピエトロ、アントニオ、ペトロニオの子どもたち、孫たち、曾孫たちも、花火師となって世界中の人たちを楽しませた。1997年になって、フランスの花火メーカーのラクロワがソシエタ・ルジェリを買収した。新会社のラクロワ・ルジェリは、今日もヨーロッパ各地で盛大な花火を打ち上げている。

「パテック フィリップ マガジン・エクストラ」（patek.com/owners）にて、この記事の特別関連コンテンツをご覧いただけます。

（上）1763年6月20日、
ルイ15世の騎馬像の完成を
記念し、フランスの宮廷で
花火ショーを開催。
色版画。18世紀の作品。
（右上）1744年8月、
シャルロッテンブルク宮殿で
行われた、プロイセンの
ルイーゼ・ウルリーケ王女と
スウェーデンのアドルフ・
フレデリク王子の結婚式で
披露された水上の花火。
ヨハン・シュミットの銅版画、
後世に着色（1744年）。
（右下）1699年、オーストリアの
ランスホーフェン修道院の
800周年を記念する花火行事。
同時代の彩色写本を
ベースにした水彩画で、不詳の
オーストリア人画家による
1700年頃の作品。

PHOTOGRAPHS: WHITE IMAGES/SCALA, FLORENCE AKG-IMAGES/ERICH LESSING AKG-IMAGES BIBLIOTHEQUE NATIONALE, PARIS/THE BRIDGEMAN ART LIBRARY